大鹿スケッチ

— 第43号 —
2014年　05月
〈 発信者 〉
前志満　くみ
〈 提供 〉
旅舎 右馬允

五月は毎年、三か月くらいあってほしいとおもう。さわやかな日を実感できるのはほんの一瞬。とにかくやることが多すぎる。春祭り、GW、そうこうしているうちに田植えがはじまり、更に気になるイモムシや春の蛾に眼を奪われている内に梅雨入の入り口に立っているのであろう。2千m級の伊那山地に緑が駆け上がっていく様子に眼を細めながら、盟主の赤石岳に目を移す。五月の清らかな光を反射し眩しいくらいの雪渓。今年は気温の上昇が緩やかなのと冬の大雪のため、雪が長らくとどまっている。

ウグイスもいろいろ

「ンー　カチカチカチ」

一昨年から楽しませてくれるウグイスがやっと右馬允の敷地内にやってきてくれた。通称「カチカチウグイス」五月一五日ごろのことだ。それから今年は「ンー　カチカチカチ」「ンーコ　カチカチカチ」「ンーコ　ティカティッ」あのウグイスの清らかな声色とは程遠い二羽の鳴き声ではあるがユニークでつい笑顔になってしまう。ちょっとテクノ系の響き。とでもいえるだろうか。

近頃、山の中では彼らがどうも支持率を上げているらしい。近くの山の上を歩いていても彼らの鳴き方に近いものと遭遇する。

ウグイスの世界にもままさかの「個性派時代」の到来か?!

先日お客様が彼らの鳴き声を聞いて「まだ鳴き方が下手糞だな～」とつぶやかれていた。「いやいや、こちらが山のスタンダードになりつつあるんですよ」と、言葉には出さなかったものの少し得意げになってみた。

ウグイスの世界で表現の自由を全うしてほしい。

鮎釣り解禁してます

五月一三日、右馬允男性スタッフ待望の「鮎かけシーズン」が開幕した。初回は矢作川へ。釣果もまずまずといったところ、初物は天ぷら、塩焼き、から揚げにしてお楽しみいただきました。

天然の大きないけすで鮎が培われています。天気や川の地形を読み取りながら素材を生かしてゆく、ありがたい修業をさせていただいています。

「ハレの日」　ろくべん

戦争で供出される前は、どこの家でも「ろくべん」があって使うのは春と秋の歌舞伎の日ときまっていたという。大鹿村伝統の「歌舞伎見物弁当」何段もかさなった弁当はなかなか機能的。今となっては1段目はおかずがはいり、もう一段という。昼の水やりをしはご飯という豪華ながら「そうか、そうか、ものではあるが、昔は季節のもの、春でんだ」と、紙谷さんは苗とあれば筍の煮しめとおしゃべり。二三日には八麦飯に梅干しといった枚の田んぼの田植えが終た庶民的なものであ了。これから田んぼをくまった。ある家庭ではなく歩き歯抜けのところ一般づかいに子供のは苗を植え、一本苗のとこ学校のお弁当としてろは2、3本足しながら整もたせていたといえる。

「イネも一本じゃぁ成長が悪いでな、足してやっておくんな」

紙谷さんは五月二〇日八八歳になった。

大鹿 HeatBeat

～大鹿の人々～　第41回

紙谷　正　さん　(88)

季季節ごとの風景と共に大鹿人の生活をご紹介します。淡々とした日々の中に熱く響く「鼓動」をお届けします。

例年、紙谷正さんの田植えは15日だ。訪ねると紙谷さんは水をあげていた。今年は気温が低いため田植え開始は18日からだ。

くらくらする大地の時間軸

大鹿村を取り囲む伊那山地や赤石山地に最近面白さを感じ始めた。最近歩いた大萱山への尾根も迷路の様で興味をひかれた。千七百くらいのおねがつらつらと続く。東へ向かってあるいて行くと「平らなんだけどグネグネしている」といった印象。尾根が複雑なのだ。地形図と照らし合わせてみても同じような感じがするのでどこの凸地なり凹地にいるのかわからなくなってしまう。（筆者自身がまだ未熟）地質の専門家によると、こういう特徴のある地形は、山になる前、つまり隆起以前の昔の地形が残っている場合があるという。どうやら1億年とか2億年の話になってしまうらしい。

一般的には南北朝から歴史が続くといわれる大鹿村だが、ある学者によると縄文時代から大鹿村には人が住んでいたという。後者の説は残念ながら裏付けることはできない。なぜなら遺跡がみつからないからである。飯田市など近隣の市町村では古墳や土器など古いもので旧石器時代の遺跡が出土している。しかし大鹿村ではみつからない。それは大鹿村を取り囲む地形が崩壊をくりかえしているからだという。例えば縄文時代からの遺跡があったとしても自然災害でとっくの昔に地中深くに埋まってしまっているというわけだ。どうやら私たちは躍動している若い龍の背中の上で生活しているようだ。

今年度より、大鹿村を更に深く楽しむための企画「大鹿プラス」が始動している。ヨガクラスや自然観察、ちょっとマニアックな大鹿探訪ができる内容になっている。（詳細HP）初仕事の依頼はTV東京からであった。「国道（酷道）をいくというテーマで浜松の水窪からR152を歩くかしたが山道にしては結構しっかりしとしている印象。悪くはない。ただ、U字工事の二人にとっては撮影の中で一番険しい道だったようで、始終ギャーギャーいっていた。これも仕事だからであろうか。栃木弁の話題で個人的には盛り上がった。

村内のR152（旧秋葉道）のガイドかと思いきや、実際は飯田市上村から大鹿村の境、地蔵峠までの約1時間。少しアウェー感を感じながらも下見から実施まで楽しませていただいた。工程は軽い沢渡り、堤防越えなどバラエティーに富んではいただいた。

最近、職業を聞かれるともはやなんと答えていいのかわからない。「フリーターです」というと、ある人から「フリーターで食べれていいねぇ」とかえってきた。「食っていけてるわけないじゃん」と心の中で呟きながら笑顔をつくっておいた。

余暇は弟たちはもっぱら鮎かけへ、私はひとり山へ出かける日々。山はいい。あるものがあるようにそこにあって。熊や狼がでてきて襲われたとしてもそれでいいと思える。ただ最善の装備は携えているけどね